都林泉名勝圖會　五

754
.M41
V.6

都林泉名勝圖會巻之五

目籙

嵯峨小督隠家　亭子院旧跡　天龍寺方丈
七老亭　亀山院御廟　同十景
亀山　大悲閣　妙智院　策彦和尚　開山堂
同寶品虫干体　雲居庵　亀山殿舊蹟
獅子岩　真乗院　法輪寺十三参　渡月橋
後嵯峨帝御廟
大井川三船御遊　嵐山花盛　葉室西方寺
宗祇斎庵　道令法師趾　清原元輔家
定嗣卿古蹟　桂里園林堂　放生會式
桂川船遊　男山　八幡八景　瀧本坊
初卯参　安居頭　萩坊
泉之坊　松花堂　淀屋巨庵蹟
棕櫚坊　山下金剛院

都林泉名勝圖會巻之五目録 終

山崎妙喜庵
芝山手水鉢
陽泉亭
京屋弥生興

茶室
山崎城跡
不衣城
藤屋月興
秦叟之好茶亭

袖摺松
相應寺古蹟
弥生花寄
角屋雪興
臥龍松
曲水亭

白河院大井川之舩の御遊のとき經信卿遅參せられしかれど帝の御氣色うるはしかりし處經信きたりて川岸に立て何れの舩なりとものせ給へとのべて勅ありて音楽の舩の伶人られしかくて妙曲を奏せられそれ帝をはじめ人々興に入給ひ諸藝に通じ何事も万人の上に立のみあればわざと遅參せられしも又御遊の花美なるべし

大井川之舩御遊

三舫賞春詩序

寛政十年歳在戊午時値仲春日期念八連朝淫雨新霽西堰櫻花盛開偶聞伶官名工泛舩賞春因促羣賢諸子追蹤從行並皆不詩則倭歌不書則丹青聚合衆舩併成三舫仰芳於嵐嶺泝舟于桂河棹分碧潭之花影攬曳青崖之蒼香清樂交奏雅詠時間用助文藻之妙思觴酌互勸笑謔屢闌以適歡娯之逸致跡誠同道長材或遞經信良會雅屢佳期多違悦予獨之幸繼恨遅景之易没傾雖昔賢無同茲懐耳況分律韻得七陽以寓鄙情于八句云

翠嶂風開雲暮香　山陰景轉碧川長　四遶清興閑縁竹　三舫歡情見羽觴　霞逐曲聲依幕落　波随酔態向舷狂　昔賢勝蹟今安在　四首春天惜夕陽

平安皆川愿題　〔印〕〔印〕

花乃白さくらのわりなくて

冨士谷　成元

なかうおもうしわらうへつる三浦の舟なりせんてしおいらく程されは

此詩ハ淇園先生及今出宗匠の自筆にて此冊稿成り風にまかせを深くあくらくに担ふの二

誹諧漢和表六句賦嵐山名所和陽韻賞嵐山花

嵐山嶺櫻花擁三舫　蘿宮

子鮎も猿を樂しみ

詩成大堰陽炎燎

歌詰橋邊彩霓長

吹あらく薄の馬場に奔落て

小督のあとハみな那須の墻

天龍寺 方丈林泉 其一

其二
開山夢窓國師作らせ給ふ庭中也

天龍寺 下嵯峨大井河の北岸にあり 五山の其一なり 此方丈の林泉は開基夢窓國師これ作らせ給ふ亀尾山をかりし山とし大堰川戸難瀬瀧を庭中の荘として山畠の妙境を山門と普明閣と號し集瑞軒の蓮池を曹源池と称し亀山の麓より水脈通じて炎暑にも涸ず萬松洞は当山の東にて松林なり龍門亭は多宝院にありて戸難瀬に向ふゆへ此名あり妙智院の庭中は僧良策彦の造る所也此人大明に渡る其時角倉宗桂を同伴 了以の父なり 遵へ将来す大悲閣了以の碑にみへたり集瑞軒は方丈の書院をいふ

天竜寺方丈の集瑞軒より嵐山をみて今日
あらし山にみつし哉

家集
吉のなる花のいろこゆるあらし山松と桜さへにほひける
夢窓國師

霊庇廟は鎮守八幡宮をいふ絶唱渓は大井河を號く三級巌は戸難瀬瀧三曲に落る亀頂塔は亀山の巓にあり嵐山の峯を拈花嶺といひ大井の橋を度月橋といふ 大路圖云 亀山殿のおれ大路筋にあり今の橋乃西上を所詳也已上當山十境開山夢窓の頌あり

宜竹集 渡八万三千戸於波心 有水皆月
架七十二丈橋於硐底 ホタ霽何虹

天龍寺什寶於客殿虫干圖

南西ノ間　開山所蔵

袈裟　白地古金襴　金地二重蔓大牡丹

袈裟　丹地富田

袈裟　紗　震旦楊岐禅師所持　歴十七世ヲ夢窓国師傳来

袈裟　紫地銀襴　国師天龍寺供養ノ時賜ヲ紫衣ヲ一

南東ノ間西側　墨蹟類

国師空谷　二大字　一文字萌黄地

国師笑山　同

国師春屋　同　中茶地

同頌　同　一文字花色地

南東間北側

黙翁頌　中字横物　一文字花色地小牡丹

圓光経文

梵音閣頌　一文字紫地紗　中白地小牡丹

北叟頌　一文字紫地紗

垂楊頌

宋舩綱司頌

南禅退院頌

平田頌　一文字白地大牡丹

南東間南側　開山墨跡

十願文　二幅對

和菴主頌

應無　雨生　二幅對

飛空鳥　二行艸書

日本拜頌　三行物

修多羅教　細字横物

宸翰案文　横物

同　東側

開山　御手状　種竹和韻

鐵舟墨蹟　二尺黒紋横物　和風　二幅

二ノ間

閑山像 自賛

閑山像 自賛

佛図国師像 閑山賛

初祖大師 佛照賛

呉道子觀音

馬祖大士 獲漢臣

国師 自賛

国師 同

国師 同

開祖像 鐵舟賛

黄龍 空谷賛

仰山 竺雲賛

高峰

中峰

興化 平石賛

佛光祖 墨跡

佛図 墨跡

絶海 墨跡

同

同

清溪 墨跡

同

亀山院 御歌切

同

後醍醐帝 御哥切

馬遠 雪峰 鈐峰 貳幅

舜舉 虎

顏輝 龍

同

邊文進 花鳥

三ノ間

右 虎

觀音大士 陳乔翁 三幅對

左 龍

羅漢 李龍眠

鷹 徽宗皇帝

鷺 林良

鷹 盧朝陽

山水 唐画

芙蓉 周之冕

蒲萄 温日観

普賢大士 張思恭

四聖圖 無準禅師

不動尊 龍湫和尚画 三幅對

文殊大士 兆殿司

達磨 顔輝筆 照無象賛

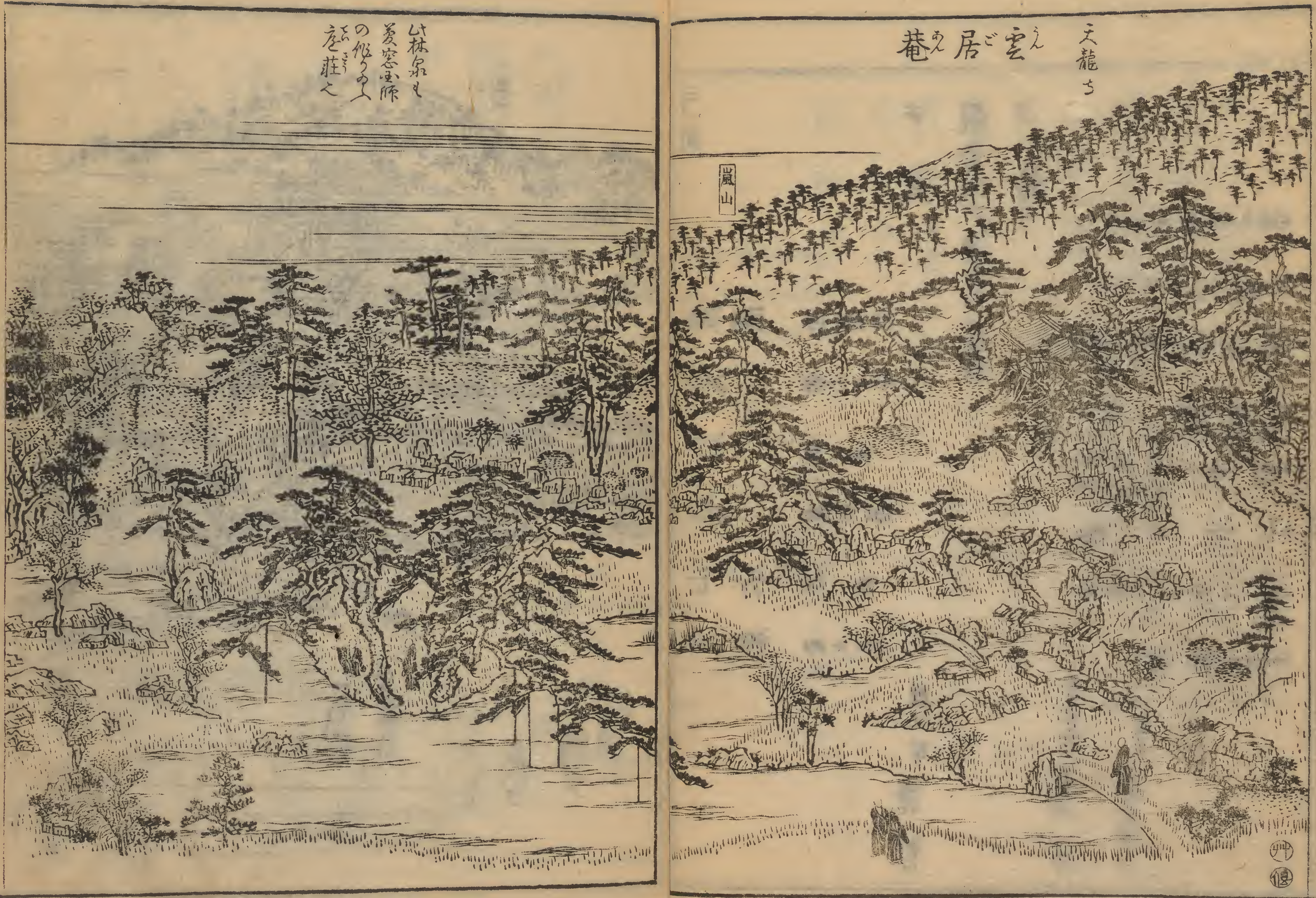
山水 馬一溪

壺公仙人 唐画

王元章梅

七賢圖 子昂

同 紀文 俞希魯


天龍寺
雲居庵
嵐山
此林泉も夢窓国師の作なり庭荘之

天龍寺塔頭
妙智院林泉
策彦和尚所池
嵐山
策彦和尚開山堂

天竜塔頭
真乗院(しんじやうゐん)
林泉
細川三齋翁
所作といふ
亀頂塔
中和

亀山殿舊跡 又嵯峨殿とも称す。東ハ今の天竜寺方丈の傍なり。南ハ大井川、西ハ亀山、北ハ所宮なり

撰集抄云 さてこの亀山の麓大井川の水の岸にあたりて院をたて給ふ
住給へるところの山は昔を忘れぬ戸難瀬の滝もさながら御垣の
内に見えてひさしく住給ふべきを思はせんたびにもそのつもりの住べき所
のかゝみし哉 絵所といふ人も筆をとびかけし 同書云 志んてんの
かたはらにはひだりにあたりて西に薬草院ひがしに如来寿院などいふ
もあり 天王寺の金堂をうつされたる多宝院とかやきてられ
たる大多勝院と申ゆる寝殿の御持仏をまうせられたる
亀山殿の棧敷殿に九月十三夜御歌合を興行せられ 同書云

山の紅葉
外なりしそれもなのく深さらむ紅ふかく見る山の紅葉 本院御製

かめ山の仏洞ふかく
わが君のとはるゝからにしる山の紅葉もなほぞ紅ふかき深き 亀山太上天皇

和仁元年亀山殿十首歌上巻秋
大井川みちれてうかぶ木の葉までも年ふる秋の色ぞかはらぬ 左大臣

亀山宮
この君のおほけなき世のためしにもたえなく山の岩ねにぞ久しかるべき 為家

大井川 三代實録云、伊勢斎宮内親王臨葛野川 大井川の事なり 修禊。勅遣中納言従三位
亭子院の御時 五十九代の帝宇多天皇を亭子院と称す又寛平法皇とも称す 昌泰元年九月十一日
大井川に行幸ありて帝をはじめ諸卿和歌を詠じ給ふ。紀貫之も供
奉し侍りて仮名序を書れし事著聞集に見えたり。又
円融院の御宇 六十四代の帝 御堂関白 藤原道長公 兼家公二男 大井川に逍遥の時詩歌の船
を分て、おのおの堪能の人々その道々の舟に乗らるるに、四条大納言に仰せられて云ばいづれの
舟にか乗るべきと。公任の云、和歌の舟に乗るべしとて乗られたり。其折に

朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき 公任

後に宣ひけるは、はじめの舟にのるべかりし。作られし歌をもとりて心をとりてせられ
しかど、詩の舟に乗りて是ほどの詩を作りたらば名をあげてましと悔しきと
後悔せられけり。此歌花山院拾遺集を撰ばせらるる時、紅葉の錦の心をとりて
入るなどよし作られたる歌。独り公任のみぞ世中されば今の世の末にまで
入りたりけれ。これを大井川の三船の基なるべし 十訓抄 大意

大井川の三船といふ事　白河院西川〔大井川の一名也〕にて御幸の御時詩管絃の三の船を浮べて其道々の人々をわかち乗られけるに帥民部卿経信卿〔大納言道方卿男〕遅参の間ことの外に御気色あしかりけるをしばらくまちて来りたりけるが三事兼たる人なりければ汀にひざまつきて何れの舟にまれよせよとありけるをいそぎけるに取てかへしてみじかく管絃の舟に乗て詩哥を献ぜられけるを通俊大堰川にて詩哥を献ぜられしを三の船の御遊とて大鏡あるいは十訓抄などにて才能の部に載られたり

本朝文粋

暮秋泛大井河各言所懐和歌序　江匡衡

寛弘之歳秋九月蓬壺侍臣二十輩合宴
亀山之下大井河之上或高談艶語或絲
竹鷁詠沙鷗與鴛鸞押近紅葉與紈綺紛
楳於戯今日之興今日之情不偏好遊泛
誇四海之無事也不偏好眺望観三農之
有年也艤船者攡州刺史盡水陸之珍赴
令者翰林主人筆花鳥之事于時山水秋
深若靈夢者有八九煙嵐日暮記風物以
難一二慭詠和歌聊慰老思其詞日云云

新拾遺
ちりぬれど花をもしたふ大井川岸の山吹今さかりなり　季経

続後撰
大井河まれのみゆきに年へぬる紅葉の船路跡はありけり　定家

続古
ともちらふ入江の松にふりぬれど千世のみゆきは見えけりけふ　光明峯寺入道

玉葉
大井河岩波たかく春くれていはこの床に花ぞきにける　俊成女

続後拾
大井河井せきの水やまさるらん早瀬にをちし筏下る也　寂蓮法師

嵐山（あらしやま）

大井川の南にあり　大悲閣へ嵐道七町許にあり　山中桜多し
弥生の盛には都下の騒人きたりて遊宴す
亀山の仙洞に吉野山の桜をうつされしより花の咲けるなりけり

続古
春ごとに思ひやられし三吉野の花は今日こそ宿に咲きけれ　太上天皇

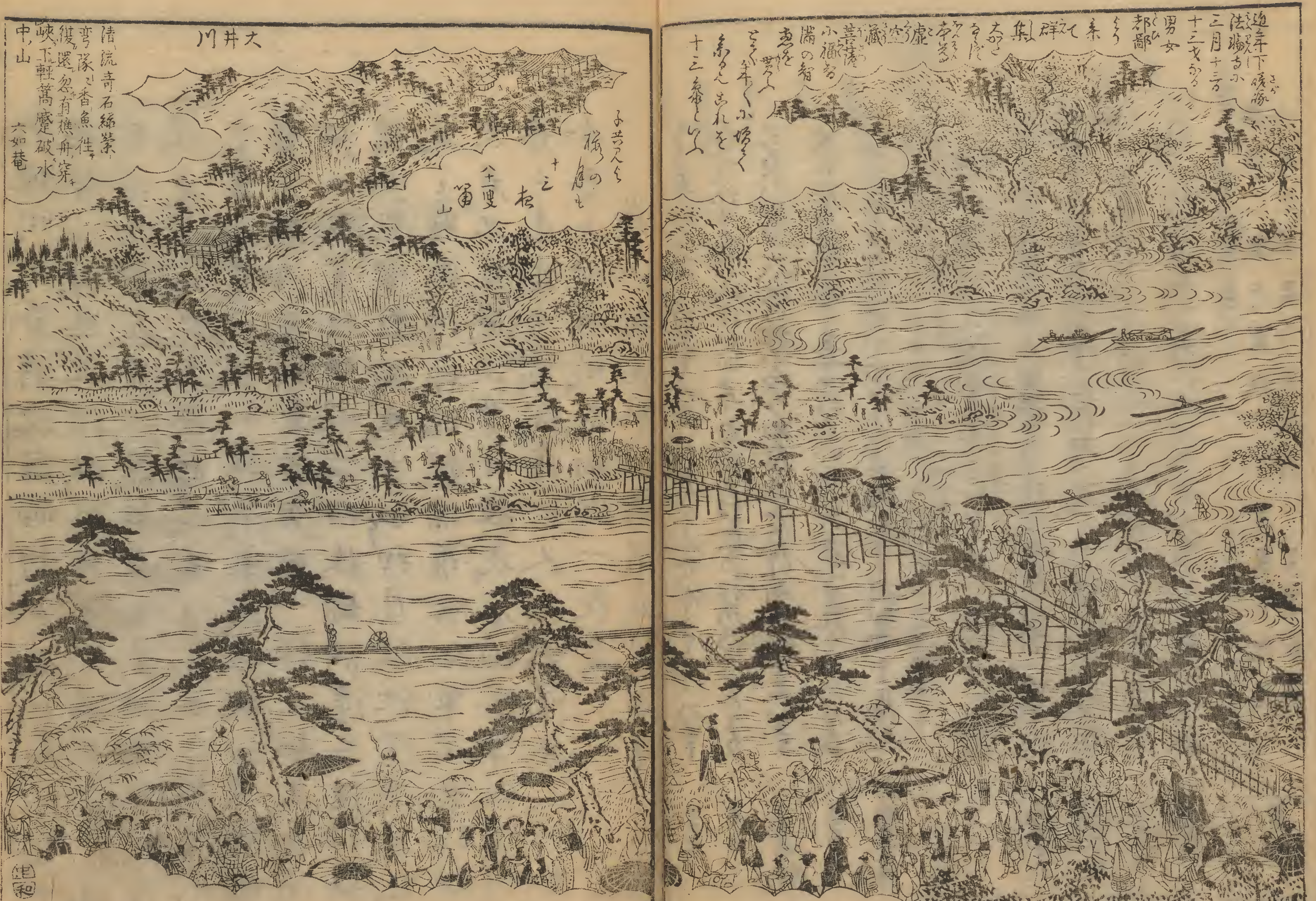
亀山七百首
あらし山峯よりわたる入月の夜半に更ても滝の音ぞきこゆる　右大弁宰相公明

新千載
ちりしをもよそに春のあらし山花の雪とはいのそさき見ん　前関白

続千
ちりてゆく桜のひかり嵐山雲ふきあへてをしむ月の影　為道

五鳳集　嵐山看花

城西三里是嵐山
二十年来百往還
人已数茎新白髪
花猶一笑旧紅顔　瑞渓



大井川
清流奇石綵叢
弯隊香魚往
復還忽有樵舟穿
峡下輕篙壓破水
中山
六如菴

大堰川上春澹沱宿雨新霽花正彩山鶯千
囀撩人徹遊人傾城狂無那一緉草屐一枝
藤我亦村店買白墮酔来益覚興激昂松枝
挂巾石上坐真箇移得畫画溪曲々都被彩
雲裹南岸花與北岸対影落春淄相映曖鴨
嘴之灘燕尾沙青幔碧毯一隊々細馬公子
按玉羈畫舫佳人唱竹枝蝶誤濃香侵紅袖
鶯啣艶雪點金卮少頃初月破煙濛流光赴
花々朦朧何郎酒醒倩羅冷石家宴散錦障
收君不見嵐山昔日種花辰山容学成芳野
春々来春去業開落今人行楽咲古人不知
今春也電過風僝雨僽一夜萎

嵐山観花歌　橘洲畑禎

宗祇法師舊庵 法輪寺の南三町許にあり 然共西行法師の古跡なるべし 今西行桜といふあり

磧礫集
宗祇法師法輪寺のほとりに庵をむすびて一とせあまり住侍りしに
ある時野州常縁とぶらひける帰るさに又月夜の空さへ曇りて
雲むらく立ちわかれる筆のあとを見侍りて帰て宗祇の許へつかはしける
とふ人もくもらん独山里の雲さへかゝる夕暮の空　常縁

道命法師蹟 こゝも法輪寺のかたはらといへ今さだかならず
道命ハ藤原道綱卿一男也
道命法師かくれて後法輪寺の桜の咲たるを見てよめる
玉葉
諸共に見し人もなきさくら花ちるをかなしみ今もなき世に　赤染衛門

葉室西芳寺の林泉ハ夢窓國師こゝに止錫の時洛陽深慶地蔵尊来現して土石を運び共に作りて名園となる其後應仁の兵火に荒蕪せしを伏見の修之助てふ者作りを補ひしといへ 圖ハ築山庭造傳に見えたれハこゝに略す 原此寺ハむかし聖武帝天平年中行基大士の草創にして伽藍魏々たる年経て遠ふしく大に荒れんとせしを時摂州の太守採部頭大江親秀といふ人當山の檀越となりて夢窓國師を請じて再興に及ぶ

夢窓集
西芳精舎に住侍りし春林の佳花を散遊ありし翌日によまれける
めづらしき花をみゆきと松風にちらぬ桜の色をみるかな　竹林院内大臣
返し
花ゆへに訪はる身にあへる老の身に千年の春も待つのみかな　夢窓

自集
征夷将軍尊氏 西芳寺の花さかりにまうでて法談の後歌讀るついでに
心ある人のとひくるしるしとや植ておきつる桜のもとに志るし　同

菟玖波集
文和五年三月西芳精舎の百韻連歌の中に
お句 道ある世のしるべ谷の鶯でゝ
忘れしが見しハ夢の夜の夢の窓　関白太政大臣

日工集
永徳二年九月十三日義満府君命赴西芳精舎紅葉會云 和漢聯句
松ふきてぬしさびしの路々の秋　二条摂政殿

新勅
世をのがれて葉室といふ山里にありけるに
侍りけるに花ならで読侍る
今もや桜花みも深し我心さそくもちえ世にすくらの花をる　按察使大納言光頼

定嗣卿山荘古蹟 葉室にあり 今定かならず
著聞集
葉中納言定嗣卿ハ和漢の才先祖にも恥ざりけれバ寛元四年の脱履にしため

たかり仙洞の執権なりしが、ふかく世をいとひて清廉の名へ有なる程に菩提の
道心の底にや侵しけん、建長元年のころ葉室大納言の栖乃ほとりに
山荘をかまへられ、同二年八月十二日よりひきこもりて院按察殿
按察殿大方へ来られけるに、上皇御すゐやありける女房して袖給
作られたるに一切にその依なたよしとて同十四日の曉まうでければ
みな衣に入てかしこはしらかるしたるに寂観に侵されて詩句にのべつらねたる 百錬抄 同之

建長第二年余齢四十三仲秋八月三
五前夜出俗塵入佛道感懐内催独吟
外形而已
遥尋祖跡思依然葉室草菴雲石前願以
勤王多日志博為見佛一乗縁暁辞東洛
紅塵暗秋過西山白月円発露涙零除髪
芟開花勢盛観心蓮長寛亜相遁名夜清
節先生掛官年新発意定然

又

陶令亮之帰休春秋四十三曽祖令道俗
八月十四日景気逢境自然銘肝昨仕朝
端何所耻 同

葉室山わけ入るにもよほして入相の月そかなしき 同

極楽の道はさてちかふぞそなたかく都の西をたのむ身ぞある 同

桂山荘園林堂

下桂村にあり。寛永のころ八条殿智忠親王の別業なり。園林堂の額、後水尾院の宸翰なり。名跡志云、今の京極家の
別荘。洛陽名跡傳云、初メハ豊太閤の指麾しく小堀遠州の造ところぞ
洛西林泉の冠たり。そのかみ
葉室集詞書云

寛永のころにや八条殿智忠親王都のあたり棲とてなく志深くしめたは
新ありしこの宮ハ御時より処々庵をさへをはれし其新志川らひ
物せよとかきの御みいかなもいくそ来まひつかり侍しく思ひつつきる
見しく撰くの亭閣にあはれをたゝみなす桂川とおて
みな紫入ら殺花の色を中にわたり
見はてかしかりつれ

元輔家

桂に山荘ありしにや旧記に見えたり
清少納言の父なり
家集 元輔の桂の家にてうたはべくせよの人々詠みしに
いかにしてまたよの事かなしにて後の世までも思ひ出らん 兼澄

桂川（かつら）宴船（さかもり）
屋舩の
あかりや
月に
うつる川
浪花
二柳

男山 雄徳山とも書く一名ハ八幡山或ハ鳩が嶺又香爐峯とも云 山嶺に八幡宮立せ給ふ石清水の霊泉あり

堀川百首
男山峯さしけれど花もまされてみの衣もかゝるさくらの花　仲実

月清
八幡山あらしの跡ふけは川波高き淀のわけかの　後京極

家集
思ひかけぬ八幡の山のやまのはをその鳴かたる聲も宮もさぞ　鎌倉右大臣

八幡宮放生會ハ初ハ法しの宇佐宮より興りて末に今も行ふところなし
圓融院御宇天延二年宣旨云石清水八月十五日御雅楽寮准諸節會延久二年八月十五日自今年上卿以下六衛府馬寮准行幸儀扈従御楽　已上諸神記

夫木
なかこ山秋のみくばの御幸をや雲にもまさりて月ハさやけき　法印行清

放生會ハ八月十五日寅の一天別當神主検知三人の神官神前に詣て神を鳳輦に遷しまつて総官祠官三神官諸神人各社僧及び他姓の大禰宜小禰宜六位四座神人御劔太刀弓等の神寶を捧げ唐櫃九合は前ハ林邑の楽人音楽を奏し二の鳳輦に引続き駕輿丁ハ白張を冠て鉾八本紬幡童子二人白幣獅子頭史生弐人駒形児四人社務三昔法院其外社僧神人神子社人数百ま雲のごとく列て前後の松明数百の挑灯四方を照すこれをおせんとて左右の席を燃す遠近より集ひて群をなし神輿ハ猪鼻坂下て神輿ハ山下二の鳥居七ヶ松の下絹屋殿に着を旅所左右馬寮御馬を牽召使掌外記史左兵衛府右兵衛府辨参議上卿左右衛府上﨟前駈等絹屋殿に参向を拝し夫より初のごとく供奉して宿院の頓宮に到る此より execution ハ

ハ儀式の儀に准じを拝し式ハ後三條院延久二年より始る三神官ハ神を頓宮に遷して鳳輦を北門の外神楽舎に立辨左右近衛参議上卿ハ極楽寺礼堂に着座を神人ハみな東方の廻廊に屯て総官祠官神主伶人楽を奏し神官神人みな神供御酒及び進物の膳を傳奥して倚に内蔵寮并に使弐人進んで官幣宣命を神官に授る則頓宮の前に献じて神官拍手を修し祝詞を讀む左右馬寮御馬を

舞て舞妓巡る事十二匝於茲神宮の撤を上卿以下諸神人退出す
其後伶人楽を奏し社僧鈍色の衣を着して高座に登る其余は舞妓
に於て最勝王経を精読す其日暮に及んで還幸し事終て附上卿
参議以下供奉せり頓宮南門の傍に列立して神拝あり社務長吏
神人伶人社僧は浄衣を着し白杖草鞋各供奉して神を本殿
に遷し稜を脱し祝詞を捧てみな退散す翌十六日には放生川の汀に
社僧出て誦経し魚鳥を河へ放つこれは最勝王経長者子流水品
の池魚の事よりおこると哉や云ひ伝へ侍る

世諺問答云 八月十五日早旦に猪鼻を神輿に奉らせ給へ附はり幸の儀式にて若
楽の舞甚だ常ならず衣冠の人々を挨ひ日にかゝやかをわすれに還幸の
ありこには神人法師原に至るまで白杖をつきて見しらぬ道におもむ
衆る儀式なりこれやむかしに紅顔ありて世路にかこれとも夕べに白骨
となりて郊原にくちぬる世のありさまをあらはしたる神道の法とかや

かく有がたき事も是また神仏の隔なきをしるべし 云云
当社神式多き中に特に結しきは二月初卯日の御神楽又十二月十四日安居
の神式あり法会は慶長の比より始りしとぞ

八幡八景 雄徳山松 極楽寺桜 猪鼻坂雨 放生川蛍
安居橋月 月弓岡雪 橋本行客 大乗院鐘

海人藻芥云
八幡社務者武内大臣後裔之善法寺新善法寺田中善法寺

平等王院 檀竹験河小路此家號祠官

茶畠の善法院の林泉は小堀遠州の作なり庭中に
太子形といへる水鉢あり又遠州好の茶亭もあり

松花堂 瀧本坊の隣地泉之坊にあり昭乗翁退隠の自坊之松花堂なり
茶室の額は叔斎屋口に帖半 茶屋は帖半 勝手二帖 二畳竈物
置棚あり 古体の唐戸あり天井ちかく葭にて編 屋根茅葺
額八分

杏花堂 比丘昭乗筆　　入深 額六角 同筆

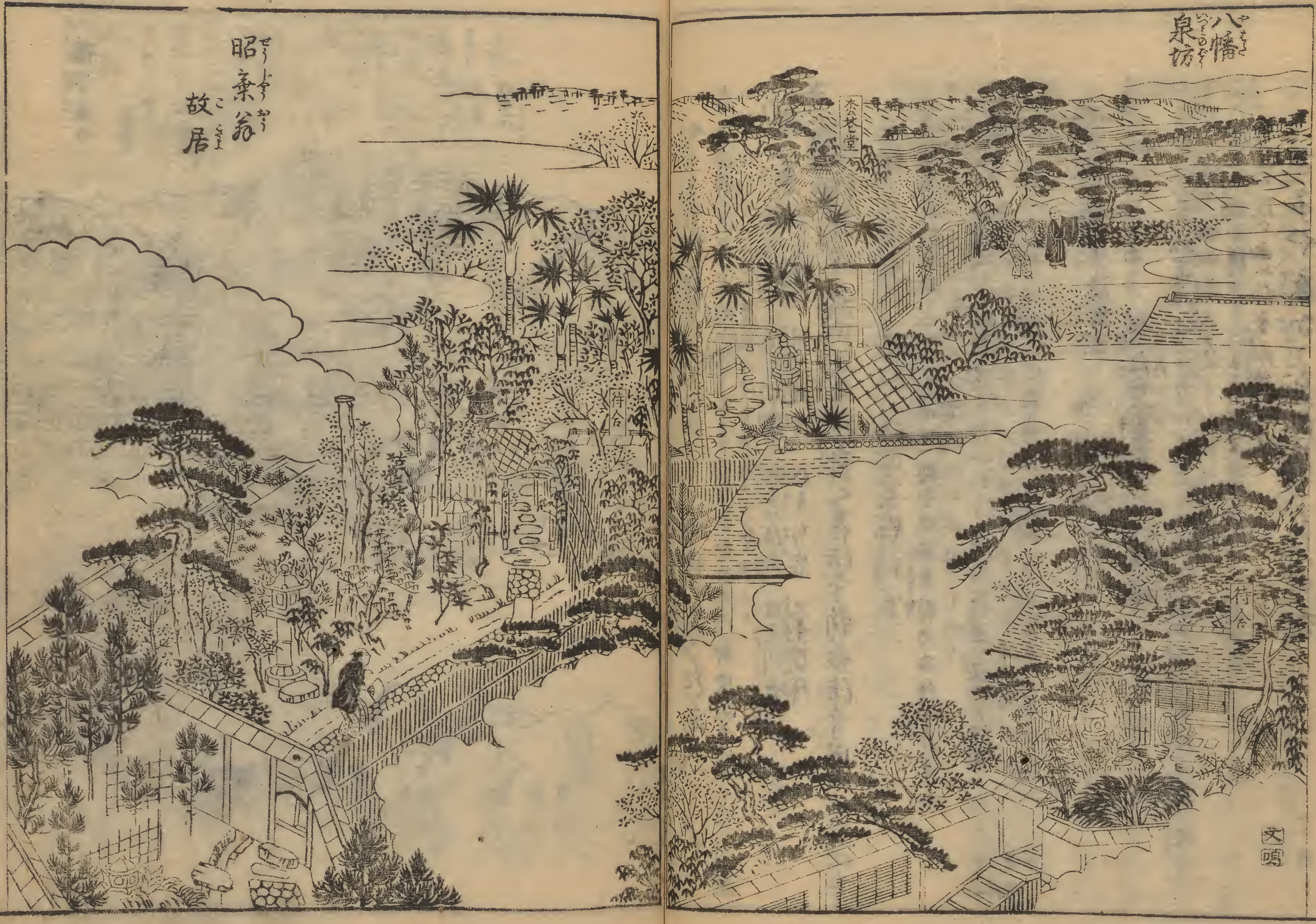
石燈爐 庭中にあり　松花堂尊前永代夜燈 慶安二年九月十八日 正良敬白
銘に曰

数寄屋待合に風流ありて庭中より宇治川 朝日山 小倉池 伏見 薄田
男山木幡里 城山 鐘に見えて無双の好景なり

萩坊 泉坊に隣る是れにも昭乗翁住して自画多し
書院の画は狩野永徳の筆なり

かゝるや麻かゝるは皮ともとの坊
宗祇

Fences Gate? cobblestone walk



八幡安居の神式は毎年十二月十五日より松の大木を伐出し山下へおろして町中練りし神前へ引望て祭礼執行なるいかめしくも厳重なりし中絶し衰へ慶長のころより再興ありとぞ聞えし

覊旅集　悼南山松花堂

此老從来與俗殊自ユ草隷得規摸　琰浮夢覺歸空界聲價爭傳水墨圖

茶白集　八幡の瀧本坊方に有りしに

ゆくみずかおかしとみれと音羽の瀧もさらに袖はぬれけれ　長嘯

其外榎橋坊も昭乗翁の棲みし所之書院の花鳥の画は永徳の筆なり
松花堂の書画多し又山下金剛院の客殿の画も永徳の筆なりとそ
其金極彩色王昌齢が西宮秋怨の詩のこころなり淀屋巨庵が旧屋
八幡山下の町にあり今は富九氏といふ人住む

山崎妙喜庵

大山崎離宮八幡の小側にあり禅宗東福寺末
昔宗院の抱所之本尊は十一面観音なり安置仏殿の額
妙喜庵住慧崇南宗寺書院の襖人物山水の画は永徳の筆
同裏山水同筆　床張附屏画杉戸表裏松に鶴表裏中
岩に尾長鳥共に
永徳の筆なり

茶室　仲客の側にあり千利休居士の営む所之　二階座四方錆壁

袖摺松　茶室の側にあり利休おこのみの棲の時秀吉公来遊ありし
袖が摺るる茶亭へ入せしとぞ古松高サ三丈余

芝山ノ水鉢　茶室の東北庭中にあり芝山と銘を躑躅形なり

此数寄屋は世に名高く茶亭の規範とするべし豊太閤来駕の時
含地五十石を土産として今なり変らず賜ふとぞいふべし

Tea ceremonial house

松花堂全圖

山崎城 天王山の巓にあり初ハ山名赤松等築く所の城地なり天正年中豊太閤と明智光秀と合戦ありし時の陣所なり

相應寺 離宮八幡の東執にあり伽藍巍々として三代實録類聚國史に見ゆ後世頽廢して今小堂あり薬師佛を安ず土人新堂といふ

土佐日記
かくてさし上るに東のかたに山のよこほれるをみて人にとへば八幡の宮といふ これをきゝてよろこびて人々おがみ奉る 山崎の橋見ゆ うれしき事かぎりなし こゝに相應寺のほとりにしばしふねをとゞめてとかくさだむる事あり 此寺の岸のほとりに柳おほくあり ある人此柳のかげの川の底にうつれるをみてよめる歌

さゝ波よするあやをば青柳のかげのいとしておるかとぞ見る

今昔物語
山崎に相應寺といふ寺あり其寺に壹演といふ僧住けり此本ハ俗也 内舎人大中臣正棟と云ける奈良の西の京に住しけり道心發して出家して後池邊の宮と申ける人の弟子として廣く渡る 眞言を受習して法を修行する事不愚 皈朝して後彼相應寺に住して常に眞言の行法を修す

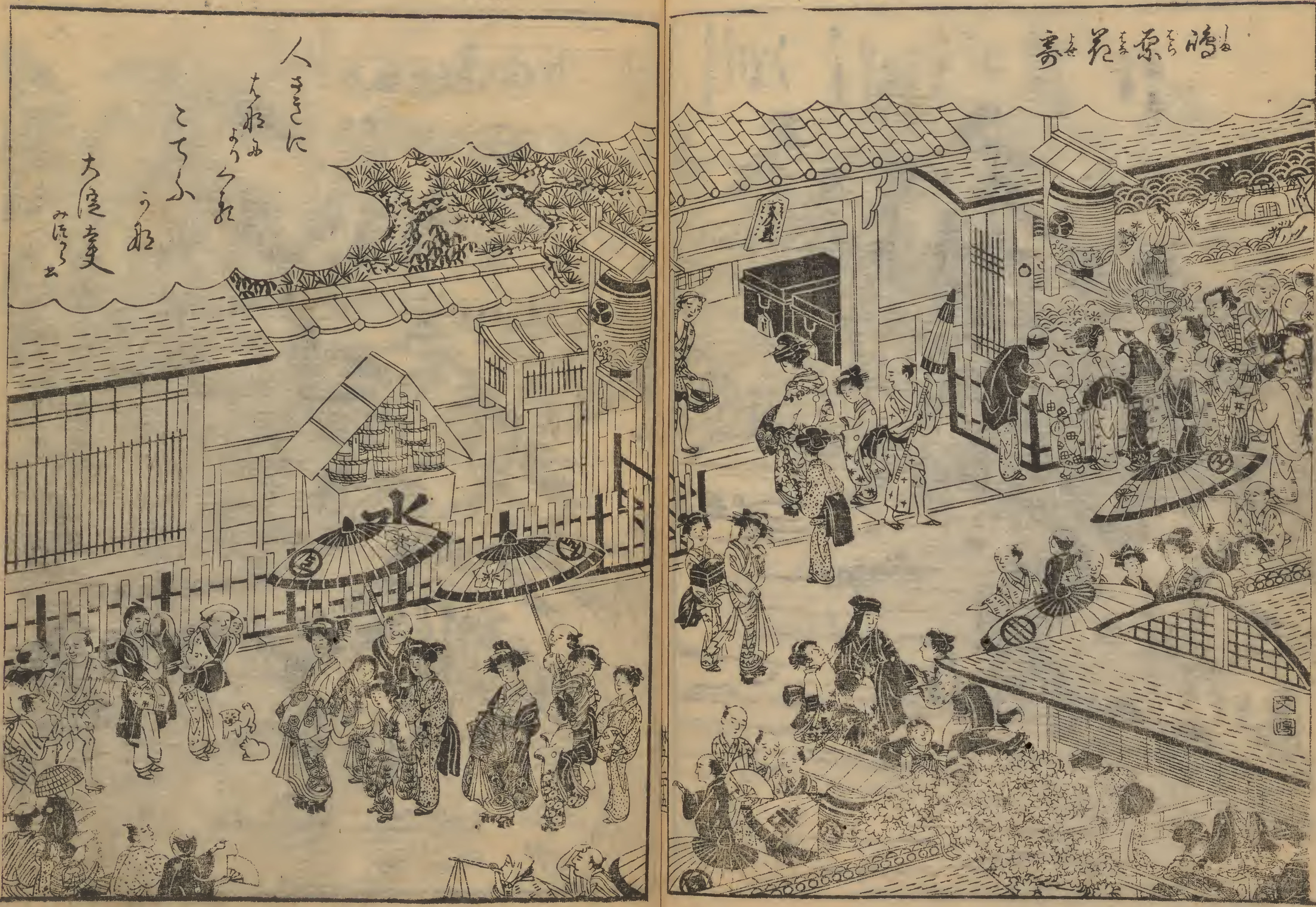
Black fence
Stones under porch

吉祥院村中
陽泉亭
林泉手入松籟遊る
八十三叟 澄月
中和

Fire buckets Geisha

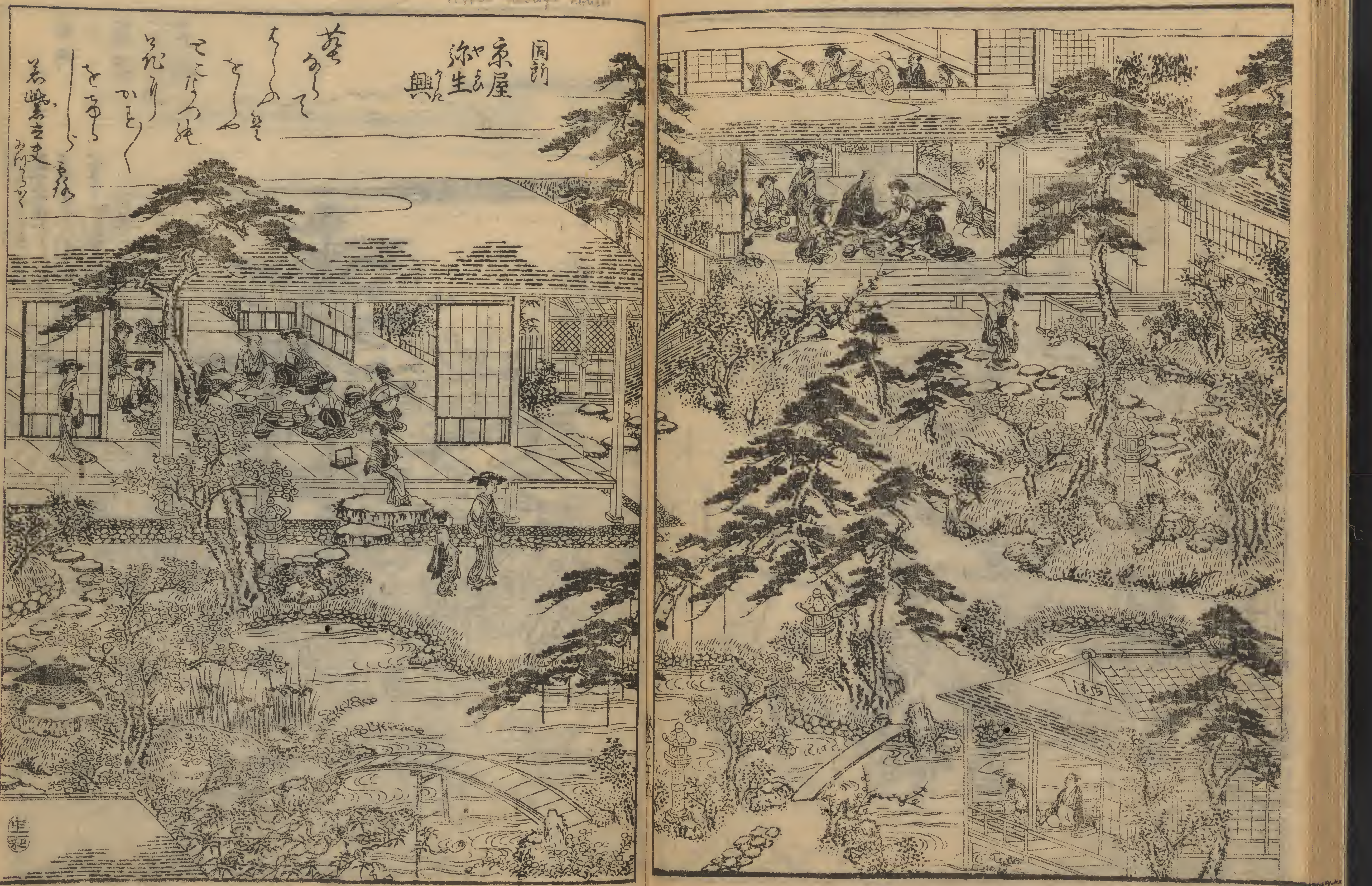
Lantern stands
Paper trunks

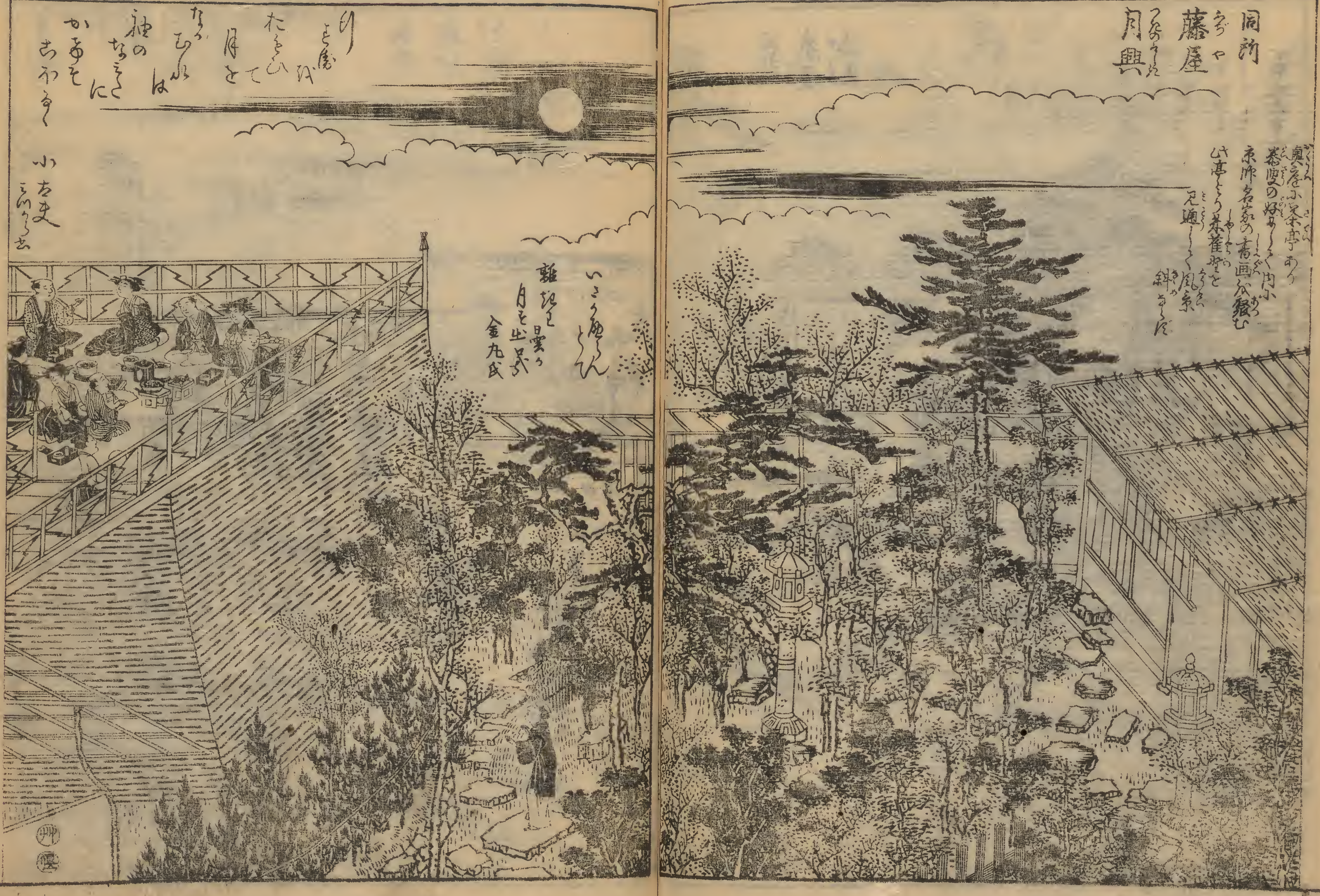
Show



Shoji Bridge Gate
Vision through house

Composition





同所
藤屋
金丸氏

Sitting outdoors, yet snow on ground

むかしも今も遊女の歌を世々の撰集にも撰れ高位に侍しる事も
あまたあり十訓抄といへる書に都の藝能にふけて家をかけ賞を蒙る
その古今数を志らずあやしの賤の女あそびくぐつまでも郢曲に傑れ
和哥を好むものも多かりし人にもしられ撰集を汚し其名を留めあまた
ありける中に亭子帝院 宇多 鳥羽院なとく御遊覧ありしときのひとこと
事なん人々も侍らざりき後に鳥飼にあそびくぐつ川あまた集まり其中に
哥よく謡ひ聲よかりしものとりわき丹波守玉渕の子 參議菅人が娘
白女と申せしを帝御船に召して玉渕は詩哥にかしこかりし
そのゆかりのむすめならばもの哥をよむ歟しらべと仰らるゝに御徒も
かくもの名ありしひとを

ふかみどりかひある春にあふ時は霞ならねど立のぼりけり　白女

と詠みたれば帝御あはれと思召て御うちき一かさねを給せ給ふ其外上達部
四位五位のくさくさめでたまひかづけものをぬぎて二間ばかりに積ばかりになりけるとなん

同女源實はつくしへゆきける時山崎にて別れ惜みける所にて

命だに心にかなふものならば何か別のかなしからまし　白女

此よみける後に古今集にいれまたそのこゝろは肥後國の遊女檜垣
の嫗は後撰集に入神崎の遊女宮城は後拾遺集を探次青墓の傀儡
名曳は詞花集に此ゆゑ江口の遊女妙は新古今の作者なりしまことの
故實あまたは世々の撰集に入雲の上にも侍りけるとぞいへし

わかれかと繋し君は憂なれや称さおとび来る物ノの聲　遊女 大橋
宿かるもいふに僧をなかきしとれ、の部。　十市
右理さ挫く郭あかりの花菜をさく　小紫
入定の日とも志らぬに紋日、の部　瓜生野
たとへねさる寝覚にはまた煩ひに　花咲
宵々の待身にはうききぬ鶏られ　若系

都林泉名勝圖會五之巻　大尾

都林泉名勝圖會跋

六条河原院乃むかしハ塩かまをうつし古きことを常にしのぶる所を
善く源融もまたこゝに住して源順ぬ人物ハ如何なれども毎 煙霞晴れ
かハる時世ハあれど此河原も風流跋して書せし賦せられし
其煙霞風流も名跡なき ハ離れ小嶋の古き跡に棲めか
いにしへを今にもかへすに於て猶おかしきを思ふよ
寛平法皇乃亭子院の御園井川の流れを入れし上東門院の御名
ハことなる泉水 鳥羽の離宮桑主輔朝の高橋立に至ても唯
名のミ残るを悲しきかな今さらに遺れる所を見出す人もなき
満ちしく畫工をいざなひて蕉たかきうつしめ目て都林泉圖會と名
号て園池の石に瀬を添ひに枕しての中の桐の海山を縮め
優る乃自在に做ひし所をえらしめ蓋其事を添えて此處を
清寺社の庭くを今まで清き佳くれぬ写して後に一王摩詰ハ
林泉の圖に美を盡し夢多し余えしとて顧みるに
筋尾に志留し侍る業乃ならし

寛政十一載仲冬

平安 秋里 籬島 書 湘夕

畫工
法橋佐久間草偃
法橋西村中和
奥文鳴源貞章

京都 吉野屋爲八
江都 須原屋善五郎

名所記総目録

浪華心斎橋通
唐物町書林 河内屋太助梓行

平安秋里籬島輯
五畿内名所圖會 全部三十冊

諸國神社佛閣の傳記山川幽谷國境村里名蹟英哲の経跡を撰ぶ名所を證歌をあげ悉く今の風景をそのまゝ縮写し間々かな文章を加へて其濫觴を記す実に全備大成の書也以下名所圖會準之

都名所圖會 全部六冊
大和名所圖會 全部七冊
和泉名所圖會 全部四冊
東海道名所圖會 全部六冊
木曽路名所圖會 全部七冊
伊勢路名處圖會 全部六冊
都拾遺名處圖會 全部五冊
河内名所圖會 全部六冊
攝津名所圖會 全部十二冊

何れも別ずり
上仕立本出来仕候
其余御好之通
仕立御用被仰付
てさせ奉希上候

北陸東奥勝地真景
廿四輩順拝図會 全部十冊

山城 近江 越前 加賀 越中 越後 信濃 上野 等八箇國 前篇五冊
武蔵 下総 常陸 陸奥 出羽 下野 相模 甲斐 駿河 遠江 参河 尾張 美濃 後篇
附録 伊勢 大和 河内 摂津 備後 五冊

山陰道名所図會 全部七冊 近刻

南海道名所図會 全部廿冊

紀伊國名所図會 全部五冊 淡路 阿波 讃岐

同後集續篇 嗣出 伊豫 土佐 續刻

文中題詩諸名家寄合書
唐土名勝図會 直隷省部 全部六冊

此書ハ今の大清直隷京師大内皇城内城外城の名圖を先として直隷[illegible]郡州ハ及まで[illegible]図を[illegible]天府より宣化府まで九ツの府并に[illegible]州[illegible]の名勝名山人物[illegible]都て画図を[illegible]中華一統を唯一部にまとめし此書に限るべし[illegible]海内の[illegible]稀なる奇籍也

唐土訓蒙図會 平住専安先生選 [illegible]橘守国画 全部十五冊

此書ハ[illegible]天文の[illegible]日月星の[illegible]より[illegible]山川[illegible]人物聖賢[illegible]仏[illegible]器用[illegible]禽獣魚介[illegible]まで[illegible]

山城名勝志 全部二十二冊 [illegible]十二枚箱入

此書ハ山城國中神社仏閣の[illegible]の書歌人英哲等の經蹟を数百編の引書ありて詳記し著[illegible]助となれり

山州名跡志 全部二十二冊

此書ハ山城國中[illegible]神祠仏堂一字も漏さんその由緒[illegible]詳し[illegible]の[illegible]圖を[illegible]其虚実を辨じ巡覧の[illegible]

帝都雅景一覧 文鳳山人書 全部二冊

此書ハ都乃勝地を[illegible]

[illegible] 全部 二冊 二面

[illegible]往古の図を一面[illegible]大内[illegible]一面[illegible]

都細見之図 懐中折本一冊

此[illegible]山城一国山川[illegible]村里[illegible]

都名所[illegible] 懐中小本一冊

此書ハ山城国神社仏閣の[illegible]

花洛細見図 折本十五冊 洛陽洛外神社仏閣寺院

[illegible]

出来斎京土産 全部七冊

京師巡覧 全部拾五冊

都歳時記 全部七冊

日本風土記　全部八冊

増補 大日本國花萬葉記　全部廿一冊　箱入　近刻

新板 難波丸綱目　全部七冊

摂州名跡志　全部廿冊

泉州志　全部六冊

長崎紀行　[illegible]　全一

東國名勝志　全部五冊

東れ記行　全部五冊

西國船路記　[illegible]

都れなの免　続本　二冊
[illegible]

住吉名勝圖會　全部五冊

勝地 真景 山水奇觀　浪華 旭江 縮圖　前後合四冊

摂津名所圖會　全部十冊

東海道五十三次神社佛閣名所旧跡[illegible]

難波かゞ免　続本　五冊
[illegible]

浪速
河内屋喜兵衛
河内屋太助

寛政十一己未歳仲夏發行

皇都書鋪
六角通御幸町西江入町
小川多左衛門

754
.M41